熊本県立劇場季刊誌 ほわいえ
Quarterly magazine FOYER
2020 autumn

つながる、ひろがる、あつまる
ほわいえ

006

FOYER

What is the BELCA award?

Special feature
熊本県立劇場 BELCA賞受賞
時と、文化と、人とともに 100年建築へ

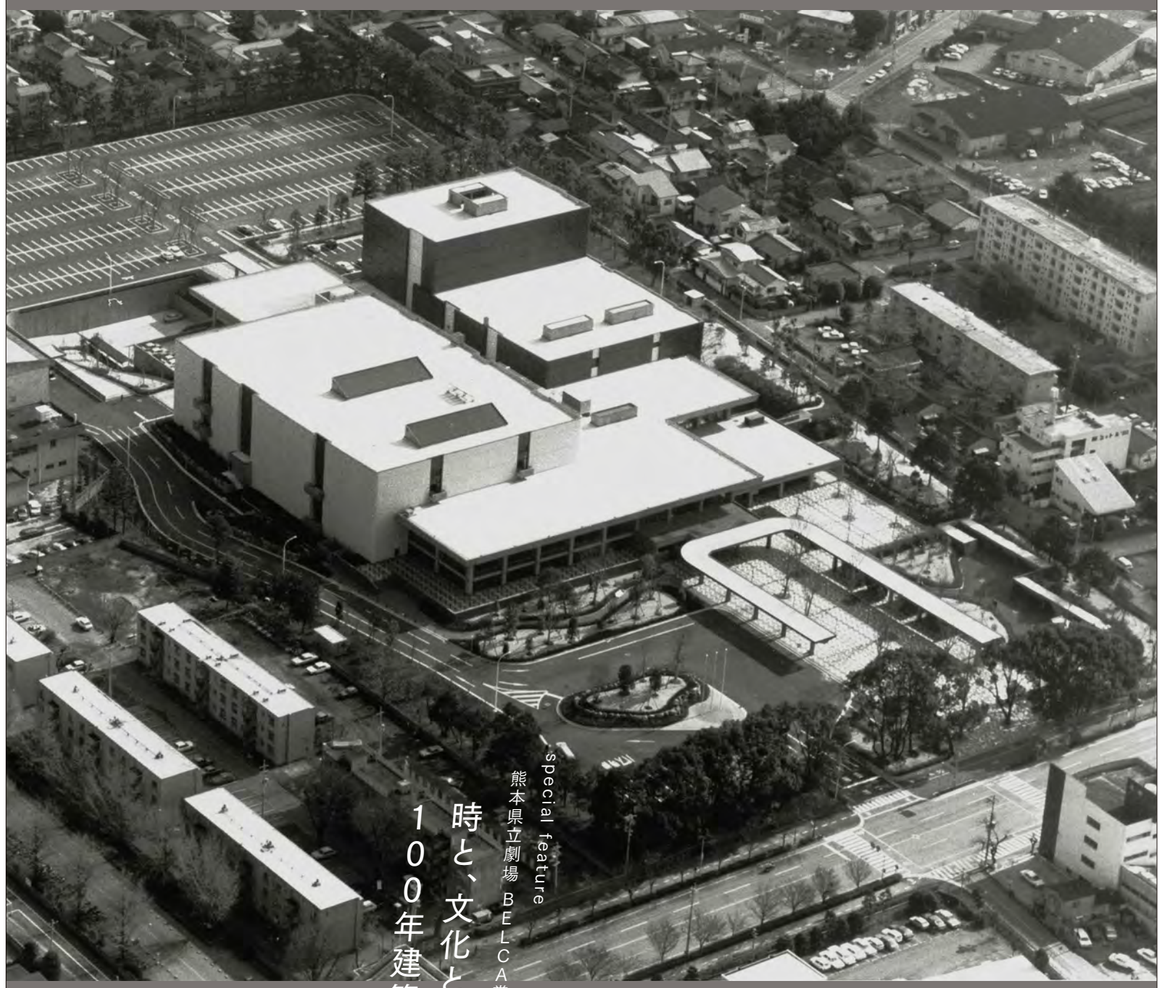
ケンゲキ オンラインスクール
ホールと教室をつなぐ 特別な演奏会

熊本県立劇場
KUMAMOTO PREFECTURAL THEATER

【企画・発行】
公益財団法人 熊本県立劇場
熊本市中央区大江2-7-1 〒862-0971
www.kengeki.or.jp

【編集・制作・印刷】
株式会社 ジャム
熊本市中央区練兵町45早野ビル1階 〒860-0017
www.jam-cf.com

熊本県立劇場季刊誌 ほわいえ　2020 autumn　発行日:2020.9.20　※掲載内容は9.10現在のものです。



special feature

熊本県立劇場 BELCA賞受賞

時と、文化と、人とともに100年建築へ

完成間近の県立劇場を空から撮影。
東西に貫かれた動線がよくわかる
（1982年12月撮影）

What is the BELCA award ?

熊本の文化振興の歴史とともにある建築物

公益社団法人ロングライフビル推進協会が、長期にわたり適切な維持保全を実施し、優れた改修を行った建築物に対して贈るBELCA（ベルカ）賞。2020年に発表された第29回BELCA賞のロングライフ部門において、熊本県立劇場が表彰を受けました。

1982（昭和57）年に竣工した県立劇場は、築後40年弱と比較的新しい建築であるものの、これまで計画的に維持管理、保全が行われ、芸術文化振興の拠点施設として建物を長く利用し続けようとする姿勢が高く評価されての受賞となりました。

より芸術性の高い文化を、より良い条件で、より多くの県民に触れていただきたい。このコンセプトを基に、当時の施設基本構想では、コンサートホールと演劇ホールの専用ホールを併設した先駆的な構想を掲げていました。設計にあたったのは、モダニズム建築の旗手として戦後の日本建築界を牽引した前川國男氏。「100年持つ建築を創れ」と主張していた前川氏は、県立劇場の設計に際して「私のライフワークとしたい」とまで言及していたほど心血を注いだといいます。

PC板を取り付ける様子（1982年3月撮影）

県立劇場は、地下2階、地上3階の鉄骨鉄筋コンクリート造。西側の正面からのアプローチと東側の駐車場からのアプローチをつなぐ通路（モール）を中心に、北側にコンサートホール、南側に演劇ホールを配置。この東西方向の動線であるモールは、施設に入る人、駐車場に向かう人のアクセスを確保するとともに、それぞれのホールへの音の影響を避ける役割があります。また、専用ホール設計には、前川建築の劇場設計の集大成としての試みが行われています。コンサートホールはステージと客席が向かい合うエンドステージ形式で、1800席以上のホールにも関わらず明瞭な音の響きが確保され、残響時間約2秒になるよう綿密に計算されています。演劇ホールは、舞台と客席が明確にわけられているプロセニアムステージで、オーケストラピットを有し、地階席には歌舞伎用仮設本花道が設置できるようになっています。

音響専門家、舞台専門家を交えて

立てられた計画によって、内装はコンクリート打放し仕上げで客席を包むように構成されています。そこには数種類の木目のパターンを組み合わせた矢羽根模様が施されています。至るところに感じられる職人の丁寧な手作業が、コンクリート造りにあたたかみを加えています。ホール内のシャンデリアをはじめとする照明器具、ホールの座席、ホワイエのテーブルや椅子、屋外に設置されたゴミ箱にいたるまでオリジナルで製作され、意匠の細部にまで貫かれた前川建築の精神を感じ取ることができます。

コンサートホール、ホワイエのタイル貼り（1982年7月撮影）

100年愛され続ける建築物をめざして

新築当時からの意匠を厳密に守りながら建物としての魅力を維持し、時代のニーズに対応し、利用する人に寄り添った最新の設備への改修や、劇場としての機能向上に取り組んできました。その改修・保全計画は、事業や公演など運営上に支障がないように、建物のライフサイクルを考慮したうえで2005（平成17）年に、大規模工事を含めて立案。さらに実際の建物の状況を照らし合わせ、2015（平成27）年に再度計画の見直しを行いました。この年に実施したのが、コンサートホールの舞台照明設備の改修工事で、揺れ抑制装置を天井内に設置しました。翌年の2016（平成28）年に発生した熊本地震の際には、外壁に大きな被害があったものの、前年の改修工事が奏功し、ホールの約300kgのシャンデリア10灯は無事で、天井も無傷でした。改修工事の計画立案、実施のために設けられた前川建築設計事務所との打ち合わせを重ねることで信頼関係が築かれ、熊本地震という想定外の問題に対しても迅速な対応ができたことが、その後の施設管理、運営にも良い影響を与えています。

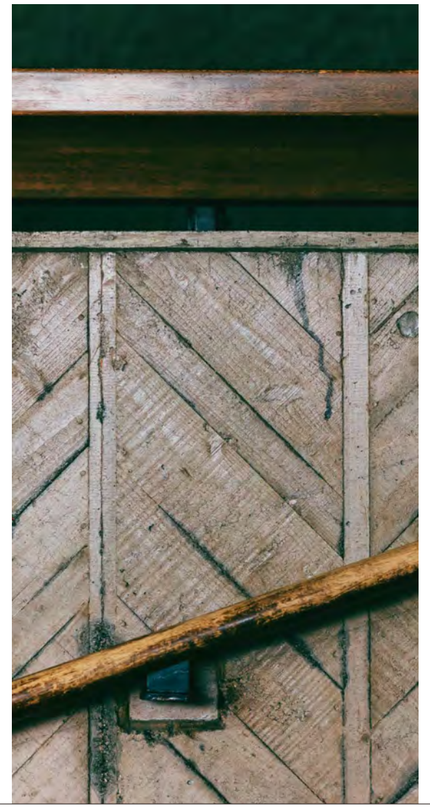
前川國男氏が掲げた「100年持つ建築」。それは、音楽、演劇などの文化活動の発信の場として、施設を利用する人たちがいて、100年使い続けられる建築という意味が含まれます。空調、電気、給排水、舞台設備などの点検や修理、定期的な館内の見回り、そして清掃活動といった日常的なメンテナンスは、建物の特性や設計意図を理解した職員やスタッフによって行われています。そのひとつひとつの活動には、県立劇場開館から脈々と受け継がれてきた前川建築の「作品」としての誇りから生まれる建物への敬意、そしてつねに最高の条件で、心から音楽や演劇を楽しんでもらうための安全安心への意識が込められています。竣工（しゅんこう）から約40年、そして100年に向けて。熊本の文化振興の拠点としての使命を果たし続けるための、〝覚悟〟となったBELCA賞受賞となりました。

［取材協力］
株式会社 前川建築設計事務所
江川徹氏

受賞建築物に贈られるBELCA賞の賞牌

日々の清掃活動が、100年建築へとつながっていく

※2020年10月26日～2021年3月19日まで、熊本県立劇場は改修工事に入ります。



上）床タイルのパターンは「吉原つなぎ」
下）コンクリート打放しに「矢羽根模様」

Highlight

ケンゲキ オンラインスクール ～音楽を聴こう知ろう～

ホールと教室をつなぐ特別な演奏会

新型コロナウイルス感染症の影響で、学校の音楽の授業内容に多くの制限がかかっています。感染予防の観点から授業で歌うこと、演奏することが自粛されている今だからこそ、熊本県立劇場ができることがないか。そこから企画されたのが「ケンゲキ オンラインスクール」。県劇のコンサートホールと学校の教室をオンラインで結び、子どもたちにプロの演奏家によるリアルタイムの演奏を届ける取り組みです。

企画の監修・教材作成に、熊本大学大学院の瀧川研究室の協力をいただき、小学校の低・中・高学年それぞれの学年の教科書に載っている曲目を選定。演奏の前後に解説を交えた構成で30分間のプログラムを作成しました。夏休み直前の7月下旬の3日間、合計7回の演奏会を設定し、熊本市内の小学校に参加を募りました。直前の募集にも関わらず、予想をはるかに超えるたくさんの参加申し込みがありました。初日の第1回目の小学校低学年向けの演奏会には、合計で76クラス、2000人以上の児童が参加。これは、コンサートホールを満席にし、さらに立ち見が出て、ホワイエまでお客さんがあふれるくらいの人数です。

コンサートホールでの演奏をリモートで、しかも大勢の人に届ける取り組みは、県劇でもはじめてのこと。いかにライブ演奏を良い音で、ホールに響く音の感動をそのまま届けられるか。実施日まで何度もリハーサルを重ね、試行錯誤しました。最終的にはZoomで教室とつなぎ、YouTubeLiveでホールでの演奏を届ける方法を採用。慣れない中でお届けしたリモート演奏会でしたが、知っている曲を聴いて体を動かしたり、拍手したり、音楽を心から楽しんでいる子どもたちの姿が画面越しに多く見られました。「コンサートホールで、観客は画面の中の子どもたち。経験したことのない状況でしたが、豊かな響きのホールで生の演奏を届けられてよかった」と、第1回目の演奏を担当したピアノデュオの谷脇裕子さんと柴田遥子さんのコメントにあるように、演奏活動の自粛を余儀なくされているアーティストにとっても貴重な演奏体験になったようです。

企画監修・教材作成
熊本大学大学院准教授　瀧川淳

今回の演奏会は、オンラインで〝リアルタイム〟の演奏を届けることに意義があります。録音・録画ではなく、演奏者の音を感じ、ライブで共有する時間を提供したいと考えました。県劇の格調高いコンサートホールで実施できたことで、豊かな響きまで感じられる贅沢な時間になったと思います。また、演奏活動が激減しているアーティストに演奏を依頼することで、支援にもつながります。今後はホームページ上で演奏会の映像や学習ワークシート公開など、新たな形の音楽鑑賞として展開していく予定です。

コンサートホールの舞台で演奏が行われた。客席にいたのはスタッフのみだが、教室では多くの子どもたちが鑑賞した。

TOPIC

妖怪「アマビエ」を題材にした清和文楽新作を制作中

疫病を鎮めるとの言い伝えから、コロナ禍の中で話題となった熊本ゆかりの妖怪「アマビエ」。清和文楽の職員が演目「雪おんな」の人形をアマビエに変化させ、SNSに投稿したことをきっかけに、アマビエを題材とした新作制作プロジェクトが動きはじめました。人形浄瑠璃芝居の脚本は、劇団「市民舞台」の松本眞奈美さんが担当し、人形の衣装は熊本デザイン専門学校の学生たちが制作。初演に向けて準備を進めていますので、お楽しみに。

オリジナル脚本はなんと40分以上の大作になる予定。

アーティスト紹介
PLAYERS SQUARE

Cheers Trio チアーズトリオ

遠く離れていても、音楽は共有できる

Cheers Trio　チアーズトリオ
辻 由美子（ソプラノ）、亀子 政孝（コントラバス）、春日 香南（クラリネット）

新型コロナ感染症の拡大によって、劇場の公演が次々とキャンセルされる中、アーティストたちの活動の場も大きく制限されています。そんなコロナ禍におけるアーティスト活動の新たな形として注目されているのが動画配信です。音楽や演劇といった芸術文化は、豊かに生きるために必要なもの。芸術文化を新たな形で発信するため、県立劇場公式YouTubeチャンネルでアーティストの動画を配信する企画「#おうちで拍手を！」を立ち上げました。その第一号として配信したのが、歌と管楽器、弦楽器といった異色の組み合わせの「Cheers Trio」です。

平成24年度の県劇アウトリーチ事業の登録アーティストとして活動していた同期の3人が結成したアンサンブルで、独自のアレンジによるサウンドに定評があります。曲間に軽快な解説トークを盛り込むスタイルで、多数のコンサート活動を行っています。今回の配信動画は、神奈川、長崎、熊本と3人の活動拠点が離れているため、それぞれの自宅で演奏した動画を後から編集するという方法を取ったといいます。LINEで夜なな会議を行い、議論を重ね、曲目によって衣装や演出を変え、時にそれぞれの子どもたちが飛び入り参加するハプニングもあり、できあがった動画はCheers Trioらしいあったかいものに。ライブとは違い、呼吸を合わせる難しさ、画面の角度や演奏以外に配慮すべき点が多くあったものの、離れた場所でも演奏ができるという新たな発見があったとか。動画配信の演奏はいつでも、どこでも、誰でも鑑賞できるので、多くの人に自己紹介できた点が良かったといいます。

最後にコロナが収束した後の願いを聞くと、3人とも「お客様の前で演奏をしたい」との答えが返ってきました。

熊本県立劇場公式YouTubeチャンネル
ケンゲキアートチャンネル
www.youtube.com/user/kengekiweb

公演情報やアーティストのコメント、熊本の伝承芸能のアーカイブなど、劇場からの情報をお届けする公式チャンネル。コロナ禍の中で企画した「#おうちで拍手を！」では、熊本県出身のアーティストから動画作品を募集し、発信しています。今後もさまざまな作品を配信する予定です。

左から **亀子 政孝**［かめこ まさたか］　**春日 香南**［かすが かなみ］

まなびの風景
SCHOOL SQUARE

山都町立清和小学校 生涯学習「清和文楽」

農村の娯楽として江戸末期から伝承される人形浄瑠璃「清和文楽」

江戸時代末期に淡路の人形芝居の一座から清和村（現在の山都町）の村人が技術を習ったことが、人形浄瑠璃「清和文楽」のはじまりといわれています。一座を構成したのは農家の人々で、農閑期の〝娯楽〟として地域にある舞台などで上演していました。各地の行事に招かれることもあり、清和文楽は農村芸能として集落で伝承されてきました。今日に至るまで、幾度か衰退の危機を迎えたものの、昭和54年（1979年）に熊本県の重要無形文化財に指定されたことをきっかけに再生の動きが高まり、平成4年（1992年）に九州唯一の人形浄瑠璃専用の劇場「清和文楽館」が完成しました。

人形浄瑠璃は、情景描写や登場人物の喜怒哀楽を語る「太夫」と、太夫の横で演奏する「三味線」、そして3人で一体の人形を操る「人形遣い」で構成されます。淡路の人形浄瑠璃と同様に、身振りが大きいことが特徴。人形の首（かしら）は、各地から買い求めたもので年代や作者によってサイズがバラバラです。中には明治中期の著名な人形師「天狗久」の重要文化財級の作もあります。

小さい頃から慣れ親しんできた農村芸能を〝楽しむ〟

清和小学校の小学4年生から6年生に向けた生涯学習の一環で、「清和文楽」の指導が清和文楽館で行われています。保存会のメンバーや文楽館の職員が指導者となり、「太夫」、「三味線」、そして「人形遣い」にわかれて練習します。

地元の子どもたちにとっては、文楽館は保育園の遠足などで小さい頃から親しみのある場所であり、清和文楽は学校の総合学習でも取り組んでいるほど身近な存在。取材した日の練習は、太夫と三味線はオリジナル演目「雪おんな」、人形遣いは足遣いの特訓でした。保存会の会長である片山勇次さんによると、足遣いはまわりの状況や感情などを表現するためにとても大事な要素だとか。

5年生から参加しているという6年生トリオ、堀くん、倉岡くん、藤島くんに話を聞くと、はじめたきっかけは上級生の発表を見て「おもしろそう！」と思ったことから。集大成となる6年生最後の発表会で「かっこよく演じる」ことが、3人に共通する目標です。

左から6年生の堀光瑛くん、倉岡圭くん、藤島隆之介くん。集大成となる発表会に向けてがんばっている

OPEN! BACKSTAGE

コラムでつなぐ交流の場

音響さんのお仕事道具

マイク

音響さんは音にこだわりますが、音の入り口(マイク)に最もこだわります。マイクは音の入り口であり、音声を電気信号に変える装置です。音が出る仕組みは次のとおりです。

①マイクは集音した音(空気の伝搬)を微弱な電気信号に変換し、ミキサーに送る。
②ミキサーは集めた音(電気信号)を加工・調整して、パワーアンプに送る。
③パワーアンプは微弱な電気信号を増幅させ、出力装置(スピーカなど)に送る。
④スピーカーは電気信号を空気の伝搬に変換し出力し、耳が音を感じる。

そして、集音したい音の質によって、使用するマイクを変えます。使用するのは大きく分けて2種類のマイクです。

ダイナミックマイク(写真右):音源から近いものや大きな音を集音するときコンデンサーマイク(写真左):音源から遠いものや繊細な音を集音するときダイナミックマイクの使用例としてヴォーカルマイクがあり、近接効果(マイクに近づけると低音域が増強)による量感あふれる音が見込めます。コンデンサーマイクの使用例として寄席や高座、漫才やクラシック音楽の録音にも使われることがあります。ダイナミックマイクに比べ、高感度で広い音域と広い範囲の音や話芸や楽器の繊細なニュアンスを拾うことができます。しかし、衝撃や湿気に弱いので、取り扱いに注意が必要です。

音響さんは観客、出演者にとって最高の音になるように機器の全体構成を構築します。その入り口であるマイクは最も重要です。だから、音響さんはマイクにこだわるのです。

右)SHURE SM-58 通称:ゴッパー
左)SONY C-38 通称:サンパチ

あなたの楽器見せてください

熊本ウインドオーケストラ団長
山口 拓郎(やまぐち たくろう)

ホルン

フレンチ・ホルンとも呼ばれるこの楽器を初めて手にしたのは高校生の時で、以来35年演奏してきました。マイ楽器としては、このホルンで3台目となります。熊本地震の後に購入しました。もともとオーケストラの曲が好きで、憧れのホルン奏者と同じものを、と思いましたが、高価すぎてこちらのモデルとなりました。いい音を出すためには、イメージ(妄想)がものを言うと常々感じております。

このコロナ禍で、5月に開催予定だった所属する吹奏楽団の定期演奏会も中止となり、毎週土曜日の全体練習も思うように行えておりませんが、来年5月に県立劇場コンサートホールで開催予定の第32回定期演奏会で、ご来場の皆様に楽しんでいただける演奏をすることをモチベーションに県立劇場コンサートホールのステージをイメージしながら演奏活動を行っています。

ホルン(ヤマハYHR-871D)

山口 拓郎[やまぐち たくろう]
熊本ウインドオーケストラ団長

県劇スタッフリレーコラム

施設サービスグループ
湛 志乃[たたえ しの]

心の師匠ふなっしー ～私の着ぐるみ愛～

着ぐるみに魅了されたのはいつだったか記憶にありませんが、いい歳をして着ぐるみに入ってみたい!と思い始めて――年。そして、約10年前、縁あって念願の着ぐるみを着るチャンスが訪れました。私は着ぐるみを着るだけでよかったのですが、せっかくならお客様の前で披露しては?と言っていただきました。

内気な性格ゆえ緊張しながらお客様の前に立つと、「かわいい!」の言葉の嵐。次第に気持ちが大きくなり、舞う仕草や速足で歩いたり、立ち止まって首を傾げたり。もし自身の姿だったら決して出来ないことを着ぐるみの力を借りて振舞うのは最高の気分でした。

数年前に大ブレークした千葉県船橋市非公認キャラクター、ふなっしーを覚えてますか?私は、はじめて見たとき、「なんだこのキャラクターは!?もーうるさいっ!」とチャンネルを変えていました。その後テレビでは見ない日がないくらい人気者になりました。

ある日、NHKの番組でエッセイストの阿川佐和子さんとふなっしーが対談する番組をたまたま見ました。番組内では、ブレークするまで見向きもされず嫌われていた苦労話や今は幼稚園などを訪問し、子どもたちと触れ合う機会を作り、子どもたちを笑顔にしたいという目標の話を冷静に話されていました。番組が終わったとき、私は深く感心し、嫌いだったふなっしーを嫌いどころか好きを通り越して、尊敬していました。それから私はふなっしーの虜になったのです。私を含め多くの人がふなっしーのファンになったのは、ふなっしーが見ている人の期待に応えようと「一生懸命」になっていることをどこかで感じ取れたからだと思います。

私はチケット販売や施設を利用されるお客様のエスコートをする仕事をしています。さすがに着ぐるみを着て仕事をするわけにはいきませんが、一人でも多くのお客様に笑顔になっていただくために、私の〝心の師匠 ふなっしー〟から学んだ「一生懸命」をモットーにこれからも業務に励んでいきたいと思います。そして、最後にもう一つだけ。ふなっしーは決して着ぐるみではありません。

寄稿

ヴァイオリニスト・熊本交響楽団コンサートマスター 黒葛原 康子

ケンゲキオンラインスクール

2020年7月27日・28日
コンサートホール

7月末に行われたケンゲキオンラインスクールに、中学年・高学年向けの2日間参加させて頂きました。新型コロナウイルスの影響で音楽の授業内容が制限される今、子どもたちにコンサートホールからライブで音楽を届けよう!という画期的な取り組み。それは、本番の機会が全く無くなっていた私たち演奏家にとってとても贅沢な時間でした。生のアンサンブルができる嬉しさ、ホールの響きに包まれる心地よさ、本番を迎える緊張感も久しぶりの感覚!なにより、モニター越しに見えるたくさんの可愛く元気なお客様の姿に、演奏する喜びを思い出したのは私だけではなかったと思います。

準備やリハーサルの面でも生の演奏会の段取りとは違う部分が色々とありましたが、オンラインだとこんなこともできるのか!と驚いたこともたくさん。より良いものになるよう配信ごとに試行錯誤されている方々の姿を目の当たりにし、できないことばかりを見るのではなく、今できることを考えながら前を向いて進まなければ、と感じた時間でもありました。

未だ先の見えない状況ではありますが、この時期をポジティブに乗り越えるエネルギーをもらえた2日間。こんなに素敵な企画に関わらせて頂けたことを本当に嬉しく思います。心よりありがとうございました。